

昌平坂学問所と論語と渋沢栄一

いちき 市来 津由彦

1 素朴な問い：渋沢栄一にとってはなぜ『論語』だったのか

- ・ 渋沢栄一(青淵。1840-1932) 『論語と算盤』(1927)、『論語講義』(1925)
 - ・ 実業における利益追求と道德との両立
- ・ 三島中洲(毅。1830-1919)「義利合一論」(1886)。実践としての朱子学陽明学を生きる。

←『論語』に沿って語る事が有効 = 渋沢は使いこなせた、有効とみた。

→ 渋沢が生きた時代ではなぜ、どのくらい有効だったのか。彼はどう身につけたのか。

→ 環境：明治期／漢学教養修得の幼少年期（江戸後期～幕末）

↓

2 江戸後期から明治にかけての漢学・儒学の位置

西暦, 年号	大事記	渋沢(数え)	
1790 寛政 2	異学の禁令		※徂徠学、折衷学に対し朱子学を「正学」化 第1回学問吟味。1793 第1回素読吟味 林家塾の官学化→昌平坂学問所開設。1799 新廟建設 → 1801 までに広く入学許可 → 各地藩校との連携
1792 4			
1797 9			
1840 天保 11		1 生	(1830 三島中洲、生)
1853 嘉永 6	ペリー来航	14	※各地の漢学塾・書院 … 漢学者の幕末人 <small>ネットワーク</small> 網
1864 元治 1		25 一橋家出仕	(知識教養世界=漢文記述。例：解体新書も)
1868 明治 1	明治維新	29	パリから帰国 (39 三島中洲) 静岡→政府出仕
1873 6		34	退官/実業界へ
1877 10	西南戦争	38	48 三島、二松学舎
1883 16		44	三島と親交(渋沢夫人墓碑文)
1889 22	帝国憲法	50	
1890 23	教育勅語	51	
1894 27	日清戦争	55	雨夜譚
1899 32	増訂勅語衍義	60	44 井上哲次郎『増訂勅語衍義』→ 1912『国民道德論』
1904 37	日露戦争	65	「東洋」高揚。漢文・漢学書(作文ぬきの読む漢文へ)。
1914 大正 3	第一次大戦	75	(明 42-大 5、6 漢籍国字解全書・漢文大系、 大 9-国訳漢文大成など)
1925 14		86	論語講義
1927 昭和 2		88	論語と算盤
1931 6		92	逝去

江戸と近代の葛藤(東アの課題)

- ・ 言語：共通話語要請→「国語」
- ・ 普通文=書き下し→言文一致
- ・ 教育：近代化・人心一本化
- ・ 近代モノ/「国語・国民」+勅語
- ・ 心性(生活感情)
- ・ 江戸的なものが残る=十一

※漢文・漢学=変容しつつ生きる

補論 書物としての『論語』の特質と二つの「孔子」像

- a、『論語』は読む人に解釈されることを望んでいる=権威化は望んでいない。遊べる本。
- ・『論語』概観：全二十「篇」・約五百章（条）・一万四千字弱＝各章平均三十字弱
孔子とその門人との対話が柱／簡潔な問答・各問答間是非連続
 - ※[社会関係=人間力(徳・仁)／学びによる獲得／各場面] ←→人間力によらない当時の社会事情
(人格) (春秋末)
 - ・多様な内容＋簡潔で断片的な言葉、一貫性なく並ぶ。場面周辺事情はカット。
 - ・話語に傾く表記＝問答場面を再現 →読者は心の中で仮想的に問答現場に立つ。
 - ※ 子曰はく、「^い学びて時に之を^{まな}習ふ、^{とき}亦た^{これ}説^{なら}ばしからずや（不亦説乎）。説=悦
→「(不亦一乎) いかにも心うれしいではないか。」共感をやわらかく促す=関わりの中の言葉。
- 解釈や読み込み、共感、感情移入をもともと許す。名曲の楽譜のようなもの。
一条だけでは恣意に流れる。複数の組み合わせによる解釈。しかし組み合わせは自由。
＝〈唯一の正しい解釈〉というものはあり得ない。／思索素材として東アジアで共有。

- b、『論語』と孔子：中国の社会事情由来の二つの「孔子」像（事跡の基本は『史記』孔子世家）
ア、経書の編纂に関わる「孔子」 漢～ ↓天の啓示を受け古聖人がつかんだ中国を治めるコツ

・漢～=王朝統治に儒教を必要とした→**經学**：各**經書**(五經)の編纂・伝承に関わった人＝孔子

イ、理想人格の体現者モデルとしての「孔子」 宋～ →江戸の「孔子」像へ

- ・**科挙**=個人の知力により階層移動、地位獲得可→「士」としての心の保持や生き方が課題化
- 儒教・儒学の見直し。朱子学(朱熹 1130-1200) …四書(論語・孟子・大学・中庸)の学
- 孔子＝理想人格の体現者(=近世的「聖人」：人の延長) →江戸の孔子・『論語』像の基本

※参考文献 I (△は研究書)

- ・訓読・漢文・漢学
 - 1. 牧角悦子・町泉寿郎編『漢学という視座 講座近代日本と漢学 第1巻』戎光祥出版、2019
 - 2. 佐藤進・小方伴子編『漢学と日本語 講座近代日本と漢学 第7巻』戎光祥出版、2020
 - 3. △中村春作他編『続「訓読」論—東アジア漢文世界の形成』勉誠出版、2010
 - ・市來「中国古典の文化象徴性と明治・大正・昭和—『論語』を素材に一」
 - 4. 斎藤希史『漢文脈と近代日本—もう一つのことばの世界』2007 →角川ソフィア文庫 2014
 - ・「国語」の形成
 - 5. 安田敏朗『「国語」の近代史—帝国日本と国語学者たち—』中公新書 2006
 - 6. △長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』吉川弘文館、1989
-
- ・市來『朱熹門人集団形成の研究』創文社、2002
 - 市來他編『江戸儒学の中庸注釈 東アジア海域叢書』汲古書院、2012

3 江戸後期から幕末に至る儒学の学び — 渋沢栄一『論語』教養修得の環境 —

a、寛政異学の禁と昌平坂学問所 …主に前田 2020、市川 1995、橋本 1993、犬塚 1800 による。

ア、寛政異学の禁

- ・ 1790 朱子学を「正学」に ←→ 流行の徂徠学、折衷学(1700 以後の儒学思潮の展開)
 - ・ 林述斎・柴野栗山・岡田寒泉・尾藤二洲・古賀精里 → ※大塚先儒墓所:市來撮影
佐藤一斎・安積良斎・塩谷宕陰・安井息軒ら
- ・ 学問吟味 旗本・御家人 1792=285 名。1794=初場(小学・論語)・経義・歴史・文章。
素読吟味 旗本・御家人年少 1793=15 以下。1797 ~ =17-19、小学・四書・五経、甲/乙/丙/落。
 - ・ 素読稽古(家庭・塾・学問所)→素読吟味→(入学)→学問所課業→学問吟味
- ・ 1797 幕府直轄学校化=「学問所」: 1801 頃までに整備。※寛政己未改作廟学図:文献 7、44p
 - ・ ◎員長 2・司監 2・○司講(若干名)・司計・司籍・司漏・司記・司賓 …(犬塚 1800 寛政 5)
(総教・儒者・儒者見習・教授方出役・教授方手伝・出役) …(市川 1995)
 - ・ 幕臣=通学生+寄宿寮生(旗本・御家人) / 書生寮(学問所儒者門弟=陪臣・浪人・遊学人)
- ・ 昌平坂学問所と藩校、民間漢学塾・書院 書生寮→儒学人網 ※書生寮名簿: 文献 9
 - ・ 藩校
 - ・ 漢学塾・書院

五経: 易・書・詩・礼(儀礼・周礼・礼記)・春秋
四書: 大学・論語・孟子・中庸

b、儒学の学びと教育

ア、カリキュラム …主に市川 1995、武田 1969 による。

- ・ 五科十等 経科・読書(史)科・詩科・文科・倭学科 / 甲乙丙・丁戊己・庚辛壬癸
- ・ 三段階の課程 + 作詩文 多くの藩校もおよそは同じしくみ。

1 素読=漢文テキストの暗誦 →次項目	※市川 1995:550p=6 頁 稽古所
2 講義=講授(一対一) / 講釈(一対多)	寄宿寮南楼
3 会業=輪講(経書の輪番講義) / 会読(史子集の輪番訓読)	北楼
会頭(チューター) / 予習=独看・看書	書生寮
- ・ 仰高門日講 毎日。庶民も含め自由聴講。

イ、素読 …主に辻本 2014、武田 1969 による。現代の学習との相違箇所に意味が大いにある。

- ・ 素読の実践=一対一、注なしの大字テキスト、字突棒。
 - ・ 一句一文ごとに師が訓読音読、弟子の復唱(付け読み)。稽古(温習=自習)。
→翌日。暗誦確認(復読)。次に進む(新授)。
 - ・ ある段階になると自身で読んでもいい。無味乾燥の暗記では必ずしもない。
- ・ 素読の意味=漢文の「テキストの身体化」(辻本) =文字配置・文体感覚+音感
「身体化」された漢文の語法・文体感覚の新漢文読解への適用
=漢文作文(自己の思考の発信)の基盤を作る
 - ・ 「外」のものを外として音読するのではなく、内=自己の言葉化する。
※外国語会話の修得のようなもの。その「外国語」=「<聖人>の思考」。

むすびに 一 渋沢栄一における幼少年期漢文教養の修得一

・漢文教養修得の前提環境

・時期：天保(1830～)・弘化(44～)・嘉永(48～)・安政(54～)

／地域・立場：武蔵の交通要所=情報流通　／豪農・名主クラス(藍玉の製造・販売)

・『雨夜譚』における渋沢の談話(後掲)

・渋沢元助(1809-1871。市郎右衛門・晩香)…「四書や五経ぐらいの事は、充分に読めて」

・栄一6歳～。「句読」。(三字経、) 大学、中庸、論語の二

・尾高淳忠(1830-1901。新五郎・藍香。山本北山(折衷学派)-菊池菊城門。)

・7、8歳～。小学、蒙求、四書・五経、文選、左伝、史記、漢書、十八史略、

↓ 元明史略、国史略、日本史、日本外史、日本政記／子類

11、2歳～。通俗三国志、里見八犬伝、…。

・海保漁村(1798-1866。元備。大田錦城門、考証学派。庶民の子弟を広く受け入れ。)

・22歳。「3日目に『孟子』講釈、皆に笑われる。」←考証学からは我流とみえたため？

※参考文献Ⅱ (△は研究書、▽は資料)

・昌平坂学問所

7.▽犬塚遜『昌平志』1800(『日本教育文庫 学校篇』1911。日本図書センター1977復刻版、所収)

8.▽斯文会編『写真と図版でみる 史跡湯島聖堂』：案内パンフレット

9.鈴木三八男『「昌平黌」物語—幕末の書生寮とその寮生—』斯文会、1973

・昌平黌・藩校・漢学塾

10.江藤茂博・町泉寿郎編『漢学と漢学塾 講座近代日本と漢学 第2巻』戎光祥出版、2020

・吾妻重二「東アジアの漢学分科と私塾・書院」

・前田 勉「昌平坂学問所の教育」

・江藤茂博「寺子屋・藩校・漢学塾」

11.市川本太郎『日本儒教史(五) 近世篇下』第六篇「江戸時代の教育と儒教」汲古書院、1995

・学修・試験

12.辻本雅史「素読の教育文化」(中村春作編『訓読から見なおす東アジア』東大出版会、2014)

※文献1にも同タイトル論文あり。本12は、その概説短縮版。

13.△橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』風間書房、1993

14.△武田勘治『近世日本 学習方法の研究』講談社、1969

15.前田勉『江戸の読書会—会読の思想史—』平凡社選書、2012

・渋沢栄一

16.△町泉寿郎編『渋沢栄一は漢学とどう関わったか(副題略)』ミネルヴァ書房、2017

17.江藤茂博編『漢学と東アジア 講座近代日本と漢学 第8巻』戎光祥出版、2020

18.荻野勝正『尾高淳忠—富岡製糸場の初代場長—』さきたま出版会、2015

19.▽長幸男校注『雨夜譚—渋沢栄一自伝—』岩波文庫、1984

20.▽渋沢栄一述・尾高維孝筆録『論語講義』(1923-25 述)二松学舎大学出版部、1970

21.▽渋沢栄一述『論語と算盤』(忠誠堂、1927)角川ソフィア文庫、2008

◎『雨夜譚』の談話（文献19、岩波文庫16頁以下。下線、市來。）

[生地および父母](の後半)

(父の漢学教養) また平生多く書物を読んだ人ではなかったが、四書や五経ぐらいの事は、十分に読めて、傍ら詩を作り俳諧をするという風流気もあり、また、方正厳直の気質に似ず、人に対してはもっとも慈善の徳に富んで居て、人の世話をすることなどはいかにも深切であった。そうしてその平素から自ら奉ずる所はいたって儉約質素で、ただ一意家業に勉励するというすこぶる堅固な人でありました。

[幼時の読書]

自分が書物を読み初めたのは、たしか六歳の時と覚えて居ます。最初は父に句読を授けられて、『大学』から『中庸』を読み、ちょうど『論語』の二まで習ったが、それから七、八歳の時、今は盛岡に居る尾高惇忠に習う事になった。尾高の家は、自分の宅から七、八町隔った手計村という処であったが、この尾高という人は、幼少の時から善く書物を読んで、その上天稟物覚えのよい性質で、田舎では立派な先生といわれるほどの人物であった。殊に自分の家とは縁者の事でもあるから、父は自分呼んで、向後、読書の修行は乃公が教ゆるよりは、手計村へ行って尾高に習う方がよいといいつけられたから、その後は毎朝、尾高の宅へ通学して、一時半かないし二時ほどずつ読んで帰って来ました。

しかしその読方は、今日学校で学ぶように丁寧に復読して暗誦の出来るようなことはせずに、ただ種々の書物すなわち『小学』・『蒙求』・四書・五経・『文選』・『左伝』・『史記』・『漢書』・『十八史略』・『元明史略』、または『国史略』・『日本史』・『日本外史』・『日本政記』、そのほか子類も二、三種読んだと覚えて居るが、全体、尾高の句読を授ける方法というのは、一家の新案で、一字一句を初学のうちに暗記させるよりは、むしろ数多の書物を通読させて、自然と働きを付け、ここはかくいう意味、ここはこういう義理と、自身に考えが生ずるに任せるといふ風でありましたから、ただ読むことを専門にして、四、五年を経過しましたが、ようやく十一、二歳の頃から、いくらか書物が面白くなって来ました。それも経史子類などの、堅い書物が面白く会得が出来たという訳ではなく、ただ自分に面白いと思った、『通俗三国志』とか、『里見八犬伝』とか、または『俊寛島物語』というような、稗官野乗の類がいたって好きであったのであります。そこでこの事を尾高に話して見たら、尾高のいうには、それは最もよい、読書に働きを付けるには読みやすいものから入るが一番よい、ドウセ四書・五経を丁寧に読んで腹に入れても、真に我が物になって、働きの生ずるのは、だんだん年を取って世の中の事物に応ずる上にあるのだから、今の処ではかえって『三国志』でも『八犬伝』でも、なんでも面白いと思ったものを、心をとめて読みさえすれば、いつか働きが付いて、『外史』も読めるようになり、『十八史略』も『史記』も『漢書』も追々面白くなるから、精々多く読むがよいというので、なおさら好んで軍書・小説の類を読みましたが、その極すきな証拠には、ちょうど十二歳の正月、年始の廻礼に、本を読みながら歩行いて、ふと、溝の中へ落ちて、春着の衣裳を大層汚して、大きに母親に叱られたことを覚えて居ます。

◎昌平坂学問所の教育・学修光景(文献 11、市川 1995。550 頁より。学修場所ごとに行換え。)

- ・九年大いに学制を改め聖堂学舎を学問所と称し、専ら御目見以上以下の旗本、御家人の子弟を教育する所とした。従って大成殿・庁舎・講堂等の建物も完備した。
助講として生徒の増加につれて学才ある藩士が出講した。
生徒には通学生と寄宿生とがあり、束脩謝義はない。
- ・通学生は幕臣たる者、毎日稽古所において教授方出役等から、小学・四書・五経の句読を受ける。
- ・又寄宿寮の南楼に通学する者があって、毎日輪講会読がある。
- ・寄宿寮の(内、)二棟(は)の内、旗本、一棟は御家人の寓する所で、併せて三十室三十人であったが、天保以後増築して四十八人を収容した。寮生は官費で日食炭油から医薬まで与えられた。其の入学に当っては、旗本は四書・五経、御家人は四書の講義を試験し、入寮後は読書の余暇に武芸を学んでもよいが、横文字の書は禁じた。
- ・此の外に書生寮があって、諸藩士と処士の宿舎である。
- ・稽古所では定日に経書の講義と輪講とがあり、会頭は儒員で、寄宿寮・書生寮・南楼の生徒は皆出席する。
- ・また寄宿寮の北楼では定日に経書の講義があり、幕臣三千石以上の者が聴講する。
- ・書生寮の生徒は毎月三回儒員の役宅で講義会読の席に列するのを例とする。
- ・又稽古所には一年一回の詩会、四回の文会があって、寄宿寮・南楼・書生寮の生徒が出席した。

文献8、斯文会『写真
と図版で見る 史跡湯島
聖堂』パンフレット、
9頁より